

史苑

第十七卷第一号 (通卷第七十四号) 昭和三十一年六月

マルコポーロ東方見聞録の

日本伝中に見える不思議な記載

魔石挿身の風習

白鳥清

国史を繕いて我國古來よりの外国關係の事件に眼を向けて見ると、実に日本という国柄は昭和の初め頃までは未だ會て周開諸民族の侵略を蒙り、日本の本土が敵国の爲めに蹂躪されたという記録などは一度たりとも無いのである。此の意味からすると、我が日本国は洵に立派な国柄で、世界第二次大戦争の最中に、所謂「金匱無欠の国体」などという文字で表現されたのも無理はないのである。

併し、考えて見ると、日本も建国以來今日まで歳月を経過すること千数百年であるから、其の長い間に於いては、国内でも政權の争奪に烈しい競争が展開されていて、平和の時期は比較的になかったのである。これと同様に海を

距てた半島や支那大陸の方面でも、民族興亡衰替の歴史が繰り返され、時に或る民族の勢力が強大に赴くと、他の民族を圧迫し、更に周隣民族を席捲すると云う、所謂民族興起の大嵐を捲き起していたのである。

此の大陸的な民族興起の大嵐は、其の興起民族の隣接諸地の国々を荒すのは、殆んど例外が無いと言つていゝのであり、時に日本島にも其の影響が及んだこともある。併し不思議なことに、東方に進路をとり日本に向うアジア大陸の大嵐は、途中に朝鮮半島という障壁があつたり、距てるに海峡や大海があつたりするので、大抵は朝鮮半島を吹き荒んで居る中に、民族的抵抗に遭遇して静まつて仕舞い、單に影響を及ぼすぐらいで、海を越えて日本本土に上陸し荒れ廻るということになつたのである。

ところが唯だ一度び大陸的民族の嵐の中でも、未だ曾て見たこともないという強力な大嵐が、蒙古を中心として巻き起つたことがあり、而して其の嵐の風力は大したものので、朝鮮半島を経過する中、民族的な障害物に遭遇しても決して衰えもせず、静まりもせず、終に海を渡つて九州地方博多沿岸まで迫つて来たのであつた。

我國としても、何とかして其の大嵐を喰ひ止めなければならなかつたから、君臣上下心を一にして其の大嵐の防壁に當つたのである。

然らば民族的な其の蒙古の大嵐とは如何なるものかと言へば、歴史に有名な彼の英雄成吉思汗によつて基礎づけられ、其の子孫によつて増々強大なものにされた蒙古大帝国が、巨寇を誇りかけて大小強弱の國々を席捲した大嵐のことであり、發生地オノン、ケレン河河流域地方を中心として、近隣周囲のアジア北方諸民族の居住地域は勿論のこと、遠く歐洲の天地に居住する民族の間にまで吹き荒んで、其の地方の諸民族も席捲され服従させられたのであるが、西方を荒した大嵐が静まつたと思うと、此度は蒙古の敵國である漢民族の國、南宋の國都臨安を目ざして吹き荒

び、終に南宋も滅ぼされて、江南一帯の地方が蒙古帝国の領有するところとなつたのである。

一方、東方に向つた大嵐は、朝鮮半島の統治國、高句麗を征服して、それを蒙古に臣属せしむることとしたのである。それ故、漢の武帝が巻き起した大嵐や、唐の太宗・高宗が巻き起した大嵐の時に見られるように、朝鮮半島も日本の為に嵐の障壁とならず、支那の江南地方も嵐の防壁とならなかつたので、茲に朝鮮半島から吹き来たる蒙古の東路風と、江南地方から吹き進む江南風とが、一度に二方面から日本を襲う結果となつたのである。日本歴史で未曾有の國難元寇弘安の役として取り扱つてゐる大事件はこれである。

ところで、九州博多の沿岸に於いて合併した此の東路風(軍)と江南風(軍)とが更に大なる力となつて日本全土を席捲するかと思われたが、さしもの大嵐も、日本國沿岸の防備が甚だ堅固にたつたのと、日本國民の協力した防禦力が甚だ強大であつたのとのため、單に襲いかゝつて来たというに止まり、其の風力は破挫されて仕舞い、毫岐対馬及び博多地方は勿論些少の被害に蒙つたが、日本本土は全々荒らされずに済んだのである。

それ故に此の日本本土が荒らされず安泰に置かれたことについては、神慮の然らしめたのであると宣伝されるに至つたのであるが、別段それを神秘的に考へなくとも、其時偶然にも南洋方面に發生して東北進し、年々日本國を襲う真物の颱風が、九州東海岸一帯を襲つて、蒙古の船船を覆滅せしめたという自然的現象の事実と、當時の執權北条時宗以下鎌倉武士や西國武士等の歟身的な國家を思う努力のあつたことを知れば解釈がつくのである。

また蒙古が何故大々的な再挙を計画しなかつたかについては、此の時蒙古の内部に権力争奪戦があり、其の余裕がなかつたのであるという歴史的事實を知るならばこれまた理由が附けられるのである。

いま此処では弘安役を叙述するのが目的でないで、そのことについては此れ以上言うのは止めて置くが、此の弘

安役に関連している一挿話で、學者の人々も余り關心を寄せていない物語が、マルコポーロの東方見聞録の日本伝中に伝えられているから、それを特に問題として論議して見ようと思う。

併し關心が持たれず注意が払われないに拘らず、其物語の由来が明瞭にされると、風俗習慣とか、民族心理とか、部族信仰とかいう方面から見て、重大なる結果を誘導することとなるのであるし、更にまたこれが我が日本の歴史記録、稗史小説の中には見出されない風習の物語で、たゞマルコポーロの見聞録の日本伝中のみ叙述されているということになっている其風習の由来を分明することが出来れば、其の慣習が日本人独特の慣習であつたかどうか明らかにされることになるし、而してそれが確實に日本人の行つていた慣習であつたならば、日本人の行つていた慣習の一つとして、従来の戦争物語などに決して書かれていなかった或るものを補足することになるし、之れに反して、若しもそれが日本人の行つていた固有の慣習でなかつたとすれば、日本人の慣習でないものを、日本人の慣習の如く叙述した、マルコポーロの見聞録全体に対する批判の一部分ともなり、更にその見聞録全体の記録も再検討を要する場合が多々存するであらうという觀念を導く端緒ともなるのである。余輩が其の物語中に見える慣習の究明が、重大なる結果を将来に齎すこととなるというのは斯かる意味なのである。

然らば、其のマルコポーロの東方見聞録の日本伝中に、物語られてゐる弘安役に関連する不思議な挿話とは一体何であるかと言へば、弘安の役に際し、膏氣天を衝く勢で押し寄せて来た蒙古高句麗連合軍の一隊が、九州西海岸方面の一島嶼に上陸し、更に進撃を続けようとした時、これが防禦に懸命だつた日本の西国武士や鎌倉武士等は、夷敵たる蒙古軍を一步たりとも前進させまいと茲に激烈なる彼我の攻防戦が展開されたのである。此の攻防戦の最中に起つた戦争譚としての一挿話が、余輩の所謂不思議な挿話と言ふものなのである。

其在其の挿話物語の全体を示すと、Yule 氏注釈本のマルコポーロ見聞録第二冊二五九頁に

But I must tell you a wonderful thing that I had forgotten, which happened on this expedition. You see, at the beginning of the affair, when the Kaan's people had landed on the great Island and occupied the open country as I told you, they stormed a tower belonging to some of the islanders who refused to surrender, and they cut off the heads of all the garrison except eight; on these eight they found it impossible to inflict any wound!

Now this was by virtue of Certain stones which they had in their arms inserted between the skin and the flesh, with such skill as not to show at all externally. And the charm and virtue of these stones was such that those who wore them could never perish by steel. So when the Barons learned this they ordered the men to be beaten to death with clubs. And after their the stones were extracted from the bodies of all, and were greatly prized.

とあるのがそれである。

抑も我日本国には、鎌倉時代の文学物として保元物語、平治物語、平家物語、源平盛衰記などという多くの戦記物語が存在しているが、日本武人の信仰として、当時武人間に身体の手足胴体皮下の一部分に、或る特殊な石を挿入して出陣すれば、其の石の魔力により、敵の刀剣に対して何等傷害を蒙ることがないという信仰なり慣習なりがあつたならば、武人勇者と称さるゝ者で斯かる慣習を実行して出陣したという物語や説話の、つづらひは、上記の戦記物語類中に存在していてもよかる可き筈なのに、そのような物語や説話の存在していることを寡聞にして聞かないし浅学

にして、読んだこともないのは不思議である。

更に下つて、北条氏の滅亡、吉野朝、室町幕府、戦国時代と時代が経過して来ると、世は日夜戦争を事としていた戦国時代であるから、武人の間に、若しも敵人の刀剣や弓矢に対する有力なる防禦方法として、魔石の挿身という方法が信仰され実行されていたならば、当然何等かの方法でそれが伝承されていて然る可きであるのに、上記の戦記物語にも、或は口碑説話にも伝えられていないのを見ると、当時の日本人が斯かる信仰なり慣習なりを持っていたとは思われない。従つて此の魔石挿身の風習はどうしても日本在来の風習とは考えられないのである。

ところで、外国人の日本見聞記にのみ記載された慣習で、肝腎の日本国内の文献には何等記るされていないものも、其の外国人見聞記を各方面から研究した結果、其の慣習は日本人固有の風習であつて、遇々日本人によつて書き残された文献的実例が遺存していなかつたことが証明されるようなこともある。

例えば北史（卷九四）倭国伝に、

俗殺人強盜及姦皆死、盜者計贓酬物、無財物者殺身為奴、自余輕重或流或杖、每訊冤獄不承引者、以木柱膝、或張強弓鋸其頂、或置小石於沸湯中、所競者探之、云理曲者即手爛、或置蛇瓮中令取之、云曲者即整手

とある記載の如きがそれである。これによると、確かに蛇神判の風習が隋唐頃の日本人間に実行されていたことが、支那人の見聞録に語られている。そして其の見聞録の記載は肯定する可きものと思はるゝに拘らず、昔から日本人の書き残した文献には見当らないのである。

斯かる例は存在するが、併し、蒙古時代（北条氏執権時代）の一外国人マルコポーロの見聞録の日本伝中に、魔石挿身の西国武士若しくは鎌倉武士の八人が、刀劍弓矢を以つて進撃し來つた蒙古武人を悩ましたとある記録の中に見える魔石挿身の慣習は、どうしても日本固有の慣習とは考えられないし、それかと言つて外国より移入された風習で当時の日本人がそれを実行していたものであるとも思われないから、此の記録の存在が難解の問題となつて來るのである。

そこで余輩としては、勿論マルコポーロの日本伝中に記された、忽必烈の日本遠征についての大体の記載は、真実を伝えたものとして信用するに吝かなものではないが、それに附加して叙述されている魔石挿身武士等の物語は、日本武士の風習としては真実性がないものと考察するのである。

すなれば、この記録は恐らく、日本国の条に當て嵌む可きでないものを、マルコポーロの記憶の錯覚か、記述した *memorandum* の誤偽か、それとも忽必烈の日本遠征譚に興味的な挿話として、他民族間に行われていた慣習を意識的に挿入したのかの何れかであると考へる。

マルコポーロが意識的に斯かることを為すことを敢てしたとすれば、彼の口述した見聞録全体に対して、今後更に厳格な検討を加へなくては信用が出来なくなるし、また彼の *memorandum* の誤謬か錯覚かであるとすれば、彼れ原より元の忽必烈頃永く支那に滞在していたものと、当時一度だつて海を渡つて日本に旅行訪問をしたことはいないし従つて魔石挿身の風習が果して日本武士固有の風習であつたかどうか、或はそれが外來風習であるとしても一種の魔石を信仰の対象としていたかどうかを確認することも出来なかつたので、ユール註釈本第二冊二五九頁に叙述されているように、彼は漠然と日本列島をも東支那海、及びそれに連続している南海中の島々の一つと考へていたらしいから、南海諸地方の島民間の奇慣珍習を、忽必烈の宮殿で、遠征將士の土産話か、遠海航行者の見聞談かによつて聞き知つていたので、帰国後獄屋に於いて忽必烈の日本國遠征の有様を *memorandum* によつて口述した時、誤謬ある

memorandum によつて口述してしまつたのであらう。

若しも斯かる推定が許さるゝならば、彼が直接旅行をなし其の見聞の memorandum をとつていたことがあり、獄屋に於いて口述する時其の memorandum を取り寄せることが許され、其の memorandum を基礎として口述したとしたならば、其の部分は相当確実性のある記載であると思惟されるが、彼が直接見物旅行をもしないし、忽必烈汗の官吏として其地に赴任もしたことのない民族間の叙述の部分には、其民族間の風俗習慣にしても、或は物産の叙述にしても、遠征将士や遠海航行者の見聞談を memo として書き遺して置いたものを以つて口述させたのであるうから、誤れる記載が多々存することと考へられ、従つて其の記載に信用が置かれぬ点もあるのが当然であらうと思ふ。

それ故に東亜の中世史を研究する場合、其の研究論文に、彼の見聞録を引証する者は、充分にかゝる点を考慮に入れてこれを使用しなくてはならないと思ふ。

さればとて、また、見聞録中にある物語や慣習を簡単に珍談奇習の叙述で、それをマルコポーロの空想から生れたものとし、無稽の風説であり虚構の物語であると為す研究者があるとすれば、これもまた輕卒であると言はねばならない。

想うに知識慾の盛んな忽必烈汗は、当時各方面に遠征して帰還した將軍達から、彼等が見聞した興味ある物語、珍奇な説話を、彼等の口より聞くことを非常に愉快としていたから、將軍達もまた競うて珍談奇習の報告をなして勿必烈汗を喜ばしたであらうし、また東支那海、南海諸島、印度洋方面を航行した航海者の見聞した珍らしい興味ある物語なども、当然忽必烈汗の耳に聞かされたことであらうから、自然とそれ等の物語は、皇帝忽必烈汗の耳ばかりでな

く、側近者の耳にも這入り、更に彼等の口から都の人々の間にも伝えられたであらうと思はれる。

殊に皇帝忽必烈汗の寵愛を受けていたマルコポーロは、汗の側近に侍していたので、忽必烈汗に侍して、帰還將軍の現地報告や航海者の物語などを汗と共に聞いて、更に忽必烈汗の退朝後ポーロは、將軍や航海者等の見聞談を興味本位に忽必烈汗と語り合つていたと思はれるから、ポーロの頭には種々な珍談奇聞が記憶されていたであらうし、それに就いての備忘録も書かれていたことであらう。

併し記憶に残る珍談、簡単に memo にしておいた奇聞にしても、其の量が多くなり、或は、Champa 国の珍聞であるとか、或は Java や Borneo 辺の奇習であるとか、或は Sumatra 地方の興味ある物語であるとか、或は印度や Tibet 辺の説話伝説であるとかいふようなものが、次ぎ次ぎに帰還した將軍等や航海者等の口から語り聞かされ、それからそれと記憶に訴へ memorandum に書き残して行くとしても、時の経過するにつれて、記憶の混乱 memo の錯覚を來たし、当然 Champa 国の珍習として記憶され、それが memo にされていなくてはならないものが Chipangu の条に混入して記憶記録され、それによつて口述されたり、Java や Borneo 辺の奇聞が、同じく日本国即ち Chipangu の奇聞であるように口述されたり、Sumatra や Burma などという國の説話伝説が Champa 國のものとして述べられたりしたことがあつたと考へられるし、更にまた當時の遠征将士や遠海航行者に地理的知識がなく、甲地の風習を乙地のものとして話したり、乙地のそれを丙地のものとして語つたりしたこともあつたらうから、これ等の人々の口述を正確に記録していたとしても、記録そのものが間違つてゐるということになるのである。

けれども見聞録に見えてゐる奇聞珍談は、決して彼れポーロが構想したものではなく、当時存在していた何れかの國、何れかの民族間の習慣であり、伝承であつたと見ることは差し支へないことであらうし、それが實際行つてい

た民族の条に挿入記述されていないとしても、奇聞珍談自体は決して虚構のもでもなく無稽のものでもないといふことは断言されると思ふ。

現に日本国の風習を書いてある条に、日本人が人肉を食することが見え、Yule 注(本第二冊二六四頁)に、

But I must tell you one thing still concerning that Island (and 'tis the same with the other Indian Islands), that if the natives take prisoner and enemy who cant pay a ransom, he who hath the prisoner summons all his friends and relations, and they put the prisoner to death, and then they cook him and eat him, and they say there is no meat in the world so good!

とあるが、これは明かに日本国の風習である。日本人の慣行でなかつた Cannibalism の風習を Chipangu (日本国) を彼の所謂東支那海中の島々の一つと考へていた錯覚から、斯くの如き種類の日本国の記載の中に挿入して仕舞つたのである。記憶記録に錯覚を混雜せ来たつてゐるといふ事はかくの如き点である。此の Cannibalism の風習を口伝つてゐる所へ就いて

But now we will have done with that Island and speak of something else.

You must know the sea in which lie the Island of those parts is called the sea of Chin, which is as much as to say "the sea over against Manzi". For, in the language of those Isles, when they say Chin, 'tis Manzi they mean. And I tell you with regard to that Eastern Sea of Chin, according to what is said by the experienced pilots and mariners and that is how they know the fact,

for their whole life is spent in navigating that sea. And there is not one of those Islands but produces valuable and odorous woods like the lignalee, aye and better too, and they produce also a great variety of spices. For example, in those Islands grows pepper as white as snow as well as the black in great quantities. In fact the riches of those Islands is some thing wonderful, whether in gold or precious stones, or in all manner of spicery; but they lie so far off from the main land that it is hard to get to them.

と言つてゐるが、此の条の口述なども、明らかに琉球から台湾、ビリピン群島からボルネオ島、更にセレベス島、モルッカ群島方面、換言するならば支那大陸から離れている亜熱帯に属する南海諸地域の島々の状態及び其の島嶼の土産などの大略的叙述に相違ないのであつて、それは文中に東支那海の名が出て来、南海諸地域の特産物の名が見えてゐるので誰れにでも合点されると思ふ。

此の口述を見ると、当時マルコポーロには、日本国即ち Chipangu を、今日吾れ吾れの知識内にある南海諸地域の島嶼の一部と考へてゐたのではなからうかと思われる。

恰度、Cannibalism の風習が、先きに述べたように、日本人の慣習でなかつたと同様に、種々な香料、薬種、沉香、黒色白色の胡椒などといふ世界的に特色あるものを豊富に産する地方も、決して日本国ではないのであつて、これ等は南海諸地域の特産物である。

それでそれらの産物を、特に日本国の産物として叙述しているといふのではないことは勿論文面の上から判断されるが、併し日本国伝と連続して、東支那海及び南海地域を口述している点から見ると、日本国をそれ等の産物を産す

る島の一つと考えていたことは想像される。それ故に、マルコポーロが日本伝の記録について、可なり記憶上混雜を来たしていたことが証拠立てられると思う。少なくとも日本国を非常に広く見た東支那海中の島と見、南洋方面の島々と同一に取り扱っている点に地理的知識の貧弱さがあつたと思われる。

併しこの記憶の混雜とか、地理的知識の貧弱さは、これをマルコポーロ一人に帰せしむるのは残酷であつて、寧ろ西紀十三世紀後半頃の人々が持つていた地理上の知識が貧弱であつたが為め、それがポーロの知識となつていたと考察する方が合理的であり妥当であらう。

斯くの如く論究して来ると、弘安役に関する一挿話として、身体の一部に魔石を挿入するという武人間の風習もそれがポーロによれば、日本人に關しての叙述であるが、恐らく彼の觀念の錯覚からか、或は記憶の誤謬からか、若しくはポーロの聞いた伝聞そのものの誤りかで、南洋群島諸地方の風習が、日本の武士階級の風習として日本国伝中に挿入口述されるに至つたものと思われる。

然らば人間の身体の一部に、例えば腕手股足などに或る種の石を挿入して置くと、いざ戦争という場合にも、敵人の刀剣や弓矢に対して決して負傷することなく、所謂不死身になるという思想による珍奇な慣習、不思議な信仰を持つていた民族が、實際当時何処かに棲息していたであらうかと言へば、確かに棲息していたのであつて、それはアジア南方諸地域一帯に居住していたマライ民族がそれである。彼等マライ民族は、此の珍奇な慣習を、後段に引証するように盛んに行つていたようであるから、日本伝中に記載されている魔石挿身の風習も、無稽的なものでも、虚構的なものでもなかつたことが知られるのである。

左に其の風習と持つてゐる民族の例を挙げて見よう。

マルコポーロが、支那から海路を選んで帰國したのは十三世紀の末葉であつたが、其の後、西歴第十四世紀の初頭に至り、キリスト教布教の目的を以つて、アジア大陸及び海洋群島を含む東方アジア諸地方を旅行した僧侶に Friar Odoric と云う人があつた。彼の旅行目的は、勿論キリスト教布教であつたが、其の途次、彼が見聞した諸国の事物慣習を詳細に書を綴つて置いたのであり、其の見聞録が今日残存して居るので、それによつて寧ろ吾々は當時の Friar Odoric の死は西歴一三三一年一月十四日である(東方アジア諸地域居住民族の信仰及び慣習状態を知ることが出来るのである)。

ところで、其の旅行見聞録の中で、恐らく Bonco 島の南部海岸寄りの一中心地点であらうと思われる Thalamsyn (Thalamasin) 地方に棲息した土人の風習や信仰を記載している条があるが、其處には外の種々な話と聯關して、魔石挿身の話、即ち鉄器に負傷せざる為めに魔石を挿身する話、及び斯かる魔石挿身の人々を攻撃するに當り従つて刀剣や弓矢を使用せず、Cane と club を振つて打つてゐるという話などが詳しく述べられてゐる。

Odoric の旅行記 (Cathay and the Way Thither, vol. II, p. 160) :

In this country also there be canes or reeds like great trees, and full sixty paces in length, there be also canes of another kind which are called Cassan, and these always grow along the ground like what we call dog's grass, and at each of their knots they send out reeds, and in such wise extend themselves for a good mile in length. And in these canes are found certain stones which be such that if any man wear one of them upon his person he can never be hurt or wounded by iron in any shape, and so for the most part the men of that country do wear such stones upon

them. And when their boys are still young they take them and make a little cut in the arm and insert one of these stones, to be a safeguard against any wound by steel. And the little wound thus made in the boy's arm is speedily healed by applying to it the powder of a certain fish.

And thus through the great virtue of those stones the men who wear them become potent in battle and great corsairs at sea. But those who from being shipmen on that sea have suffered at their hands, have found out a remedy for the mischief. For they carry as weapons of offence sharp stakes of very hard wood, and arrows likewise that have no iron on the points; as those corsairs are but poorly harnessed the shipmen are able to wound and pierce them through with these wooden weapons, and by this device they succeed in defending themselves most manfully. とあるのがそれである。

想ふに弘安役に関連している戦闘で、日本の西国武士が鎌倉武士かの八人が、身体の一部に魔石を挿入していたが為め、侵寇せる蒙古軍の刀劍にも、また矢鏃にも、何等の傷害を蒙らず不死身で戦っていたのを、遙か後方に於いて観戦していた蒙古の將軍等が、其の場面の状態から、それら八人の日本人は、別な方法にて攻撃するにあらずれば敗死せしむる方法がないと判断し、club にて之れを擲ち殺すよう命令を發したので、さしもの勇者も club にて打たれた為め遂に絶命して仕舞つたという見聞録中の挿話は、此処に挙げたボルネオ南部地方に居住するマライ人間の慣習を、Odoric より先き、既に元の忽必烈在位の時マールボローが支那滞在申、海外から帰還した者の口から聞いて知つていたのであると考へる。

たゞそれが前に言つたように、何れの国の慣習であつたか、何れの民族の信仰であつたか、支那に滞在中聞いた話であつた為め、ポーロの記憶の混雜が著しくは memo に錯覺を來たしていた故か、それとも Chipangai を南海諸地域島嶼の一と考へていた当時の地理的知識の貧弱であつた故かで、南海地方民族の慣習を日本国の武士に結び付け、弘安役の一挿話として口述するに至つたと見るのが妥当である。

それ故日本伝に見える魔石挿身の風習は、日本人獨特の習慣信仰でなく、Borneo 島南部地方 Thalaminasin 辺に居住せるマライ民族間の慣習が、日本伝中に紛れ込んだといふことになるのである。併し、斯る慣習信仰は、唯に Borneo 島南部の Thalaminasin 地方住民の民族間でのみ見られるのでなく、南海諸島棲息のマライ民族一般の間に慣行され信仰されていたのであるから、其の地方では有名なものであつたので、其の地方を航行した支那人及び南方地方に遠征した蒙古の將軍等の耳に這入り、それが忽必烈の朝廷に伝えられ、遂にポーロの口より日本伝に挿入されたと考えるのが最も妥當の見解ではなからうか。いま Thalaminasin 地方以外の例をみれば Conti, Travels of Nicolo, In India in the XVth Century, p. 37 及 Hak. society, 1837)

其の例は次の通り Yule 及 Marco Polo, II, p. 263, no. 3 及

Conti, also describes the practice in Java of inserting such amulets under the skin.

という文を引用して居るが、また Yule 及び Contier 及 Cathy and the Way Thither vol. II, p. 162, no. 2 に同じく Conti の文を引用して居る。

Conti mentions the amulets so used in Java major, as a piece of an iron rod which is found in the middle of certain rare trees. (Conti, Travels of Nicolo, In India in the XVth Century, Hak.

society, 1857, p. 32)

とあるのが即ちそれである。

以上 Yule 氏などによつて注釈された Confi の旅行記の文を見ると、十五世紀頃の爪哇地方棲息のマライ人間でも、魔石挿身の風習が慣行されていたことが分るのである。

Confi の述した Java (Java major) 地方の風習を Ordoñez の述した Thalassasin 地方の風習とを比較してみると、彼等が挿身に使用した魔石は、rare tree の中部から発見される iron rod の一片らしいものとされ、一は cassan と呼ばれる cane の中部から発見される stone とされているが、恐らくこれは同類の魔石を挿身した風習と考えられる。

Thalassasin 地方のが、Cassan と呼ばれる Cane 中から発見される石というのは、後に説明するように竹茎より得た石であることが知られ、Java 地方のが rare trees の中より発見される鉄片の如きものというのは、当時の西欧人間では東洋特産の竹が頗る珍らしい植物であつたのであり、それを樹木の一種と考えた処から rare trees と称したのである。すすれば両地方棲息の Malay 人は、共に竹茎中から獲得した石を珍重し amulet に使用し、それを挿身していたことが分るのである。

更に印度支那半島から緬甸方面にかけて其地方棲息の民族も、同様魔石挿身の方法で、敵人の刀劍矢鏃などという鉄類に対して、其身の安全を確保せんとした風習を有つていたことが、調査報告の文獻のあるによつて分る。

例えば Marco Polo, II, p. 263, no. 2 に Yule 氏が Asiatic Society of Bengal (1868, p. 116) を引用して居るから其の引用文を記載することとしよう。

Like device to procure invulnerability are Common in the Indo Chinese countries. The Burmese sometimes inserts pellets of gold under the skin with this view. At the meeting of the Asiatic Society of Bengal in 1868, gold and silver coin were shewn, which had been extracted from under skin of a Burmese convict who had been executed at the Andaman Islands.

これに *pellets of gold* 終じて印度支那半島居住の民族及び緬甸族の間に於ては、彼等の身体が鉄類にて傷害を蒙らなうと、金銀の coin を挿身の風習が盛んであることが分る。

上記の例文で見ると、挿身された物質は金銀の coin であるが、此の gold 若しくは silver も亦 amulet に使用されるので、其例は多くの民族間に見られるもので、印度支那半島の民族及び緬甸族もまた其の例に漏れないのであることが知られる。

其の外また印度の西部地方居住の土着民の間にも同様に魔石挿身の風習が行われていた。Wilson, History of the Madras Army (Madras, 1892—89 ; 396) に

It is occasionally used by Ramoshi (q. v.) thieves in W. India; and natives believe that the famous madras mutineer Muhammad Yusuf Khān, had a magic ball inserted in his thigh and that he could not be executed until it was extracted. (Encyclopaedia of Religion and Ethics, vol. III, p. 446)

と云う記載があるので察知される。

ついでに印度半島西部居住の土着民、即ち Madras 附近に棲つていた Ramoshi 部族の密蔵国の間の風習をマルニポーロ東方見聞録の日本伝中に見える不思議な記載

マルコポーロ東方見聞録の日本伝中に見える不思議な記載

一八

して、彼等が、魔石を身体の一部に挿入していたことと分るし、更に具体的に言うならば、有名な Madras 在住の muhammad 教徒の Madras 政府に対する反抗者 Yusuf Khan が magical ball を股間の皮肉中に挿入していたことも知られるのである。

此の場合の magical ball の實質は何物であつたか明記されてないが、Burmese の例の如く、金銀の ball か、Java や Borneo の Thalassin 地方の例の如く、竹茎から取つた一種の stone ball か、若しくは後に述べる動物の体内から得た或る種の stone ball かであつたさう。

其外にもた Borneo 島檳島のマラノ族の間では、矢鏃刀劍などという武器にて、敵人に傷けられないようにする方法として、魔石挿身の慣習とは別な方法も行われていたさうであるから、いま其の文獻的例を示すと、Cathay and the Way Thither (vol. II, p. 162, no. 1~2) の

Dalton says the Dyaks of Borneo have a defensive armour of leather which is proof against arrow, spear, and sword. This may have to do with the story of these invulnerables. But we find St. John aluding to a belief among the Malays of Borneo that by certain ceremonies they can render themselves invulnerable, though he does not specify what the process is.

とあるのはそれである。

また Dalton 氏の述べている Dayaks 人の例は魔石挿身の風習の例ではないが、鉄の武器に対して保身する為の魔石を挿身した時代から、次の段階に属する保身武器の発達を物語るものといえるかも知れない。また St. John 氏の述べている Malay 人の例は、彼等が敵人に傷けられない為めに或る儀式を為すといふことであるが、これは恐ら

く魔石挿身する儀式を秘密に行う儀式のことであつたかも知れないので、ここに引用して置くことにしたのである。次にまた初めて世界を一周したといふのでその名を勝も得た彼の有名な Magellan は、先ず大西洋を横断して米

大陸の東海岸に着く、南に航した後、所謂 Magellan 海峡を通過して太平洋に出で、進んだ終に Borneo 島の西南岸にある Matan 島に到着し、其処に Matan 島民との間に紛争を惹起し、闘争の結果、戦没したのであることは人の知る通りであるが、Matan 島民が Magellan 船隊と戦つた際、武器として使用したものは、燃焼作用で特に堅くされた cane 及び woods また lances 等であつたことが知られている。

而して、此の Matan 島民の使用した武器と同様なものを使用した民族の例は、外にも見られる、即ち Coral Sea (珊瑚海) の東方、更に詳しくいうのならば、New Hebrides 島の東方、所謂南太平洋諸島の一なる Fiji 島民がそれである。Cathay and the Way Thither (vol. II, p. 162, no. 2) の

There is such a class of invulnerables also in Fiji. The use in the Archipelago of lances, etc., of cane and wood hardened in the fire is mentioned by Pigafetta.

という記載があるのがそれである。

この文例で分る如く Matan 島民にしても、或はまた Fiji 島民にしても、彼等が戦闘に鉄武器を使用せず、lances, canes, woods などという木製武器を専ら使用するのは、結局彼等が、敵の鉄武器では決して傷害を蒙らないと信じていた魔石挿身の風習を実行していたからであり、敵人もまた其の風習を慣行していると思つたからであらう。

以上 Borneo の Thalassin 地方、Java, Indochinese Country, Burma, West India, Matan 島、Fiji 島等、アジア大陸南方地域棲息の民族へ、及び南海諸地域居住の民族間に魔石挿身風習が慣行されていたことを挙例し叙

マルコポーロ東方見聞録の日本伝中に見える水田錨の記載

一一〇

述して来たが、其等の中で Odoric より報告された Borneo 島の Talamasin 地方のものが最も色彩があり、また詳細に伝えられているのである。

然るに Odoric に記載された鉄武器により傷害を蒙らないようにという保身の故で挿身された魔石というのは抑も何物であつたのかと言へば、その魔石は Tabashir という名称の石であることが知られる。

而して Odoric に従へば、其の魔石は Cassan というものから生産されるのであるが、此の Cassan は、波斯語の Cassar の誤りであり、波斯語 Cassar は Arabia 語の khaizuran と同語であつて Arabia 語の khaizuran は波斯語の Cassar も共に bamboo のことであるから、Cassan 中より得られる石というのは即ち竹茎中に生ずる珪石塊のことだ、日本などで竹茎又は「タケミン」と言われるもので、之れを普通波斯語で Tabashir と称して居る。蓋し波斯語 Tabashir は sugar of bamboo の意が含まれている。竹茎中より得たる挿身する魔石を學界では Tabashir と呼んでゐるのである。

ところで彼等南方諸地域樵息の原住民は、此の Tabashir を探究発見するに如何なる方法を用いたであらうか、これについて報告されているのを見ると、彼等は先ず鉄器鉄棒を以つて竹林中の竹茎を敲き廻り、若し数多くの竹茎中铁器鉄棒にて傷つけることが出来ない程固い竹茎を発見すると、其竹茎中には Tabashir が含まれていると考え、之れは固い性質の木片を以つて其の竹茎を打割り以つて其の中より Tabashir を取り出すと云ふことである。

(Cathay and the Way Thither. vol. II, p. 161)

併し此の発見方法は余りにも物語的信仰的であつて、これは恰度魔石挿身の武人は、鉄武器にては殺戮されないから、固い木片にて之れを敲き破さなければならぬという信仰的な物語に比較されるべきもので、魔石を挿身している

人間が、Tabashir を有つている竹茎に突つたものである。

それ故、此の発見方法が果して竹茎中の Tabashir 発見法として完全なるものかどうが疑いなきを得ないのである。恐らく彼等の勘で、或は棒を以つて、或は鉄器を以つて竹茎を敲き廻れば、Tabashir の含まれている竹茎を多くの竹茎中から見分けることが出来たであらう。そして特に鉄器を以つて竹茎を敲き廻さという風に報告されているのは、最初先ず魔石挿身武人が鉄武器に傷けられないと云う信仰的な慣習が実行されていた所から、次いでそれが竹茎に応用されたのであらうと見る可きであらう。

擬て、先きに挙例したように、Odoric の旅行記に見える渤泥の Talamasin 地方民の使用している挿身魔石は、其の旅行記に、竹茎中より採取するものであると明記されている処から見ると、確かにそれは Tabashir に相違ないであらうが、實際上渤泥で有名な挿身魔石は Bezoar というものである。そして此の者は近世紀西欧人の東洋進出に伴い、彼等の間に高価で売買されていたというから渤泥物産の顯著なもの一つと考えられたのである。(Cathay and the Way Thither. vol. II, p. 161.)

従つて此の Bezoar は以前から Borneo に於いては有名な物産であつたと考えても差支へなからうと思う。いまマルコポーロが支那に滞在していた十三世紀末を境として、それ以後に於ける Bezoar に関連して書かれた記録を見ると、

例えは明の艾儒略 (Gilio Aleni) の著なる職方外紀(卷一)に、既に渤泥産の Bezoar のことが記されている。即ち

渤泥島在赤道下、出片腦極佳、以熬火、沈水中火不滅直焚至尽、有獸似羊似鹿、名把雜蘭、其腸中生一石、能療
マルコポーロ東方見聞録の日本伝中に見える不思議な記載

言病、西客傾寶尊之、可至百換、國王藉以為利、
とあるのがそれである。

此の艾儒略の文章から判断すると、把雜爾という石の名称は淤泥産の動物把雜爾の腸中より採取されるので、其の動物名に因んで把雜爾と云われるのであるとされているが、併し此の解釈は僅かに誤つていると思われる。Thabar-shir が竹茎中より採取されると対称して、Bezoar は動物の腸中より採集される石であることは勿論間違いないのであるが、把雜爾と云う動物が淤泥島に産して居り、其の腸中から採取されるので把雜爾と称されたというより、寧ろ把雜爾という動物は、把雜爾という石を腹中に持つて居ると考ふる処から虚構的に作された動物であると見る可きであらう。

動物の体内から採取される石ということは支那では早くより知られていて、それを胃石とか藥石とか言い、牛黄狗宝なども称していたことは明の李時珍の本草綱目を見ると分る。

而して把雜爾という語の語源は動物把雜爾の名称に因んで附されたのではなく、把雜爾そのものは外語の音訳であると思われる。

波斯語に padzah という語があり、此の語は pellens Venerum 即ち解毒の意味を有つて居るから、解毒石といふことである。同じく此の Padzah を Arabia 語と同じく Arabia 人が使用するやうになり、Badizahr 若しくは Bazar へと転化したのである。そして現在英語の Bezoar は Arabia 語の Bozahr の転化したものと思われる。

又すれど艾儒略の文に把雜爾とある語は、B 音を有する漢字が当て附めてあるのだから Arabia 語系の B 音を有する Bazar 若しくは Badizahr の音訳ではなく、波斯語系の Padzah の音訳と見る方が妥當であると考へられる。此の点或はまた支那語の特色として B 音を音訳するは平易であるが、B 音を音訳するのは困難であつたから Arabia 語系の Badizahr 若しくは Bazar は B 音を有する把雜爾という文字を音訳したと見ることも出来ようであるが、この點のへ把雜爾と波斯語系 Padzah との音訳と關係について圖へることは出来ない。

把雜爾という石は、把雜爾と云う動物の名に因んで附けられた名称でなく、解毒の意味を有する波斯語の Padzah の音訳であることが説明されたであらうと思うが、兎に角此者が「詭療百病」の故で、当時西欧人の間に膾炙されて居たのであることは、Giulio Aleni (艾儒略) が「西華國輿地記」に載つた「石田百換」と書いたのと同じ語であるので、其の辺の消息がよく知られると思ふ。

其の外に、また此の解毒石 Bezoar が淤泥の河をなす動物であることを John Graulfund が述べて居る。Descriptive dictionary of the India Island and adjacent country, 1856, p. 52~3 に

Bezoar stones, still believed among the nations of Asia, as they once were among those of Europe, to posses the virtue of expelling poisons continue to be an article of trade they are mostly brought from Borneo, where they are reputed to be obtained from stomach and intestines of monkeys.

とあるのがそれである。

更に又 Beccari 氏の Wandering in the Great Forest of Borneo (p. 327) 及び此の Bezoar stone は Borneo の各種の動物の骨をとりて作りし石である。(Cathay and the Way Thither, vol. II, p. 162, no.

1.2)

斯くの如く西欧人にして、東洋方面、殊に南海地域を旅行した人達は、何れも勃泥島の産物として Bezoar stone のことに触れているのを以つて見ても、勃泥産の Bezoar は、如何に其名の遠く西欧人の間に響き渡つていたかが察せられる。

勃泥島を最とし、其の近隣諸島が同様此石の有名な産地であることは、既に説明し來つたのであるが、産地であると同時に、南海諸地域居住のマライ系の民族は、何れも皆な此石の効能を信じていたようである。百病に効能があると信じられていたから、自然と此物の価値が生ずるのであり、尊重されるのである。尊重されるは此石を宝石と考えるに相違ないが当然である。

John Crawford, Descriptive dictionary of the India Island and adjacent countries, 1836. p. 53. p.

In Malay, they go under the names of Goliga, Mantika, and Matika, the two words being probably Corruptions of Mastika "a gem."

という記載が現れ、これは Goliga といふ語は Bazoar stone を Goliga といふ Mantika または Matika といふ語で表はすは居るということが知られ、其の Mantika 及び Matika の両語が、共に「宝」の義を有するマライ語 Mastika の訛りなものであることが了解されるのである。

Skat の有名な著作である Malay Magic (10 p. 275, 303-4) を見ると、マライ半島のマライ人は、時に或は蛇の胃腹から Goliga 若しくは Mantika を採取するものとあるが、普通には赤猿 (red monkey) 又は、豪猪 (Porcupine) の胃腹から採取する居る。而して此等 Goliga 若しくは Mantika を用いて解毒薬として使用に供

されるが、時に百病の治療にも役立つということが書かれてゐる。

マライ半島居住のマライ人の間では、此の Bezoar Stone は、red monkey または porcupine の胃腹から採取されるのが普通であるということであるが、此のことを知つて然る後に、艾儒略の職方外記に、勃泥産の把雛爾は、勃泥島特恩の動物把雛爾というものの胃腹より採取されるから把雛爾と称されるのであるという叙述を再検討して見ると、抑も勃泥島に於いては、猿類の繁殖が甚だ盛んで、種類もまた多様であるから、勃泥のマライ人の間ではマライ半島の例と同様、彼等は猿を捕獲し、其の猿の胃腹から Bezoar Stone を採取することが、或は最も多かったのではないかと推察されるのである。現に Crawford 氏が勃泥産の Bezoar は猿の胃腹から採取されると報告しているのは余輩の推定を裏付けるような気がする。(Crawford, Descriptive dictionary of the India Island and adjacent countries p. 52) それ故に把雛爾という動物の胃腹より採取するので把雛爾と称するのであると書いた艾儒略は、把雛爾という名称の石だから同名の動物から採取されるのであらうと漠然と考へた結果、今日から見ると間違つた記事を書き残すに至つたのであらうと考察されるのである。

次に Sumatra 島に於いても、其処に居住するマライ人の間に、矢張り此の腹石即ち Bezoar stone の信仰は存在してゐたのである。これを証明するに二三の文獻を挙げれば、Anderson's Mission to Sumatra (p. 323) に

"The malay, of Sumatra, too, have great faith in the efficacy of certain stones which they pretend are extracted reptiles, bird, animals, etc., in preventing them from being wounded. (Marco Polo II. p. 263)

とあるが如きは其の例である。

此の記録中、彼等マライ人は、その魔石を爬虫類や鳥類や其他種々な動物の胃腹から採取するものであるのは注意すべきものである。

想うに爬虫類の内でも蛇の胃腹から採取される bezoar が一番多いので、西欧人は此の bezoar を普通 Snake stone と呼ぶに至つたと考えられる。而して Skat の Malay Magic に於ては、マライ半島居住のマライ人間では先きに例文を示して置いた如く、屢々蛇の胃腹から此石を採取することが報告されているように、スマトラ島居住のマライ人も居住地にマライ半島とスマトラ島というように異なつてはいるが、人種が同じマライ人であるから、爬虫類の内、特に蛇の胃腹から盛んに bezoar を採集採取したるであらう。それで未だ、恰度、勃泥島住民が monkey の胃腹から盛んに採取したと同様であつたろう。たゞ、スマトラ島居住民が鳥類の胃腹から此石を採取するという Anderson 氏の報告は珍らしい報告である。

其の外にまた Lockyer, An account of the Trade in India. p.49. 1711. London. に

In this animal (Hog deer of Sumatra apparently a sort of chevrotain or Tragulid) is found the bitter Bezoar, called Pedra di Porco Siacca, valued at ten times its weight in Gold (Hobson Jobson, Bezoar)

とある文献を参照すると、Sumatra 島に於いては、動物の内、特に Hog deer の胃腹より採取するものが非常に尊重され、黄金を標準目方として十倍もの高価で売買されるということであるから、これは余り数が多くなく、珍らしいものであることが想像される。

斯くの如く勃泥島を中心として、其周囲の南海諸地域、諸群島に棲息するマライ民族の魔石挿身の風習、魔石崇拜

の有様を探究して見ると、魔石挿身風習の本家本元は南方マライ民族であつたと思われるのである。而して最後に、Marco Polo の日本伝の記載をみると、魔石挿身の西国武士が若しくは鎌倉武士かの八人の者が、弘安の役に活躍したとある挿話は、確かに日本の西国武士や鎌倉武士の間に行われていた慣習を書いたものではなく、勃泥島や馬來半島やスマトラ島 Java 島などという南方一帯の島嶼間に居住棲息するマライ民族間に行われた敵の鉄武器、即ち刀剣矢鏃によつても傷害を蒙らない方法として、魔石を挿身する風習、また従つて、反対に魔石挿身者を殺戮するには、固き質の Wood や Cane を使用する風習、斯かる風習を忽必烈の朝廷に仕えていた頃聞き知つていたマルコポーロが、帰国後獄屋にて見聞録日本伝を口述する時、南海地域の此風習を故意にか、誤つて記録された彼の memo の故にか、それを日本伝中に叙述して仕舞つたのであらうと思う。